

発行

北海道ポーランド文化協会

〒006-0006

札幌市手稲区西宮の沢6条

1丁目16-1-210 佐光方

電話・FAX 011-215-6696

samitsu0204@gmail.com

http://hokkaido-poland.com/

POLE

第85号 2015.5.15

北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会

東京事務所

〒107-0052

東京都港区赤坂9-6-29-309

音響計画株式会社 霜田気付

電話 03-6804-1058

FAX 03-6804-6058

第72回例会 朗読会へのご招待 午後のポエジア Part5



2015. 6 / 13 (土)

開演 PM 2:00

(開場 30分前)

北大クラーク会館 3F

国際文化交流活動室



《午後のポエジア》は日本人とポーランド人が家族や友人ぐるみで広く交流する、市民に開かれたつどいです。

出しものは朗読のほか、映像、歌やギター、篠笛、三味線などと幅が広がって、次は何が飛び出してくるかとても楽しみです。毎回ポーランドの女性たちが手作りしてくださるケーキも人気の的です。

北海道は青葉の季節。北大正門から緑の木陰を進みクラーク会館に着くと、会場はポーランドの香りがいっぱいです。お友達を誘ってお気軽にご参加ください。



共催：ポーランド広報文化センター 後援：札幌市・札幌市教育委員会

※ 入場無料、事前申し込み不要。 写真は昨年の様子。



“午後のポエジア” 5を体感して

塚本 智宏

「午後のポエジア」5は 2015 年6月 13 日(土)午後2時から北海道大学クラーク会館3階国際文化交流活動室で開催され、約 50 名が参加しました。今年には北海道新聞の事前取材があり、その記事を見て参加された方もあり、楽しい会となりました。

ポーランド広報文化センターはじめ、たくさんのご支援、ご協力に心から感謝いたします。

ポーランド文化協会の年間行事の一つとして定着した「午後のポエジア」。今年には5回目の開催とのこと。ポーランド語と日本語が交錯しながら、部屋は例によって伝統がある(といえば聞こえはいいが)クラーク会館の古い一室、このときだけ、朗読の声と音楽とが響き合う文化空間となる(格調高い「学芸会」との声もある)。私は協会への参加は新米者で、この土曜の午後のポエジアは今回はじめての体験でした。というよりそれはやはり体感でした。

美しいポーランド語の発音、清新な若者の詩の朗読、成熟した男性たち、思いのこもる迫力ある朗読、心で聴き入る幻想詩や自作詩の数々、子どもの絵本と夢の世界。今回登場した作者・作家は、ヴィスピャンスキ、ミウオシュ、シンボルスカ、バルシュチェフスキ、シュルヴィッツ…ポーランドでは有名な、でも私にとっては覚えてたの詩人や作家。これにキーボードによる伴奏と歌、三味線…子ども達の明るく澄みとおった歌声。

そう、やはり協会 HP に書いてあるとおり、「朗読の魅力」をたっぷり体感し「お洒落な時間」を堪能させていただきました。「午後のポエジア」は、日本人とポーランド人が家族や友人ぐるみで広く交流する市民に開かれた集いで、今年も最後は懇親の場にポーランドの女性たち手作りのケーキが登場し集いを盛り上げていました(Bardzo smaczneho!!)。

来年は私も少しは教養を高めて参加できるでしょうか。コルチャックの文章も詩的といわれます。作品を少し考えてみたいと思います。

参加者の皆様、楽しい時間をありがとうございました！

(つかもと ちひろ)



写真(上から)「午後のポエジア」の書、司会：アレクサンドラ・ヤヴォロヴィッチ=ジムニ&栗原朋友子、出演者挨拶



1. ◆ S・ヴィスパンスキ「わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない」エヴァ・コヴァルスカ&新井藤子
2. ◆ C・ミウォシュ「別れ」レナタ・シャルック&小林暁子
3. ◆ W・シンボルスカ「マリーとピエールの愛」「ピエールの死をこえて」アレクサンドラ・ヤヴォロヴィッチ=ジムニ&大塚広介（以上、写真1段目左から）
4. ◆ 宮沢賢治「雨ニモマケズ」マレク・クラフチック&小笠原正明
5. ◆ J・バルシュチェフスキ「白ロシア幻想譚」より 越野剛
6. ◆ U・シュルヴィッツ「おとうさんのちず」大久保律子
7. ◆ 宮沢賢治「鹿（しし）踊りのはじまり」熊谷敬子（以上、写真2段目左から）
8. ♪ M・グレフタ 詞・曲「キミがボクの恋人になったら」〈歌〉ミハウ・マズル&〈キーボード〉安藤むつみ
9. ♪ 斎藤由貴 詞・崎谷健次郎 曲「月野原（つきのはら）」〈歌&キーボード〉新井藤子
10. ♪ 三味線演奏〈端唄・三味線〉花季会社中（花季汀蘭&汀美）（以上、写真3段目左から）
11. ◆ 自作詩「足跡（そくせき）」より 菅原みえ子
12. ◆ 夏目漱石「夢十夜」より 霜田千代麿；懇親会・乾杯発声：小笠原正明（以上、写真4段目左から）
13. 懇親会・ポーランドケーキ；♪「クラクフ一人」（民謡）&「ヴィスワ川が流れる」（民謡・E・ヴァシレフスキ 詞）〈歌〉河村明希カリナ・恵李アンナ&リリアナ・コヴァルスカ（写真最下段）

（◆ 朗読；♪ 歌・楽器演奏、敬称略）

スタニスワフ・ヴィスピャンスキの辞世の詩

栗原 成郎

19世紀末から20世紀初頭にかけて「若きポーランド」の芸術運動の美学理念のもとに『婚礼』、『解放』、『アクロポリス』などの一連の象徴劇を創作してポーランド演劇に新時代をもたらした劇作家、ポーランドの美術館を飾る肖像画、風景画の名作を世に残した画家、クラクフの聖マリア教会の内部装飾や聖フランシスコ教会のステンドグラスのデザインなど、広範な美術領域にわたって活躍した多才な芸術家スタニスワフ・ヴィスピャンスキ Stanisław Wyspiański (1869–1907) は、短命で38歳で世を去った。彼は、「辞世の句」と言うべき詩を2編残した。その一つは次の詩―

わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない
Niech nikt nad grobem mi nie płacze

わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない
ただひとりわが妻を除いては
きみたちの犬の空涙も 取り繕った悲嘆も
わたしには何の役にも立たない

わたしの柩の上で吊いの鐘を鳴らすな
慟哭の泣き歌も聞きたくない
わたしの埋葬には雨が泣けばよい
強風が吠えればよい

志のある者は 土の塊を
わたしの息が詰まるまで投げ込むがよい
わたしの土塚の上には太陽が照りつけ
乾いた赤土を焼くがよい

そしてできれば何時か 何時かまた
わたしが寝ていることにうんざりする時、
自分を閉じ込めている仮庵を毀して
太陽に向かって駆け昇るだろう

明確な姿をとどめて飛びゆく
わたしを、きみたちが目にした時は、
私自身の言葉をもって
わたしを呼び戻してくれたまえ

わたしが星となって天界への道を
通りゆく時に その言葉を聞いたなら
わたしは わたしを滅ぼそうとした労苦に

いまひとたび 挑むだろう

1903年7月22日 リマヌフにて

もう一つの詩は―

わたしがこの世を捨て去る日が来たとき
Gdy przyjdzie mi ten świat porzucić

わたしがこの世を捨て去る日が来たとき
わたしは、自分のための吊いの歌を
いったいどんなメロディーで自ら口ずさむことにな
るのか？
なにしろわたしは、とっくの昔にこの世を捨て去っ
たのだから。

わたしが、もはや縁の切れた懐かしい事どもを
嘆き悲しむのをやめてから すでに久しい
わたしの悲しみを取り戻し、盗み取られてしまった
ものを
奪い返すことなど どうしてできよう。

わたしは、失われた楽園の夢を
とっくの昔に捨てたのだから。
どこかの川のほとりで、どこかの国で…
生きている者として名を呼ばれるために…
わたしは生きているのだから。

どこかの町の、どこかの川のほとりで
わたしは女と結婚の誓いを立てた。
そこで女と自分のために家を建てた、
それを一つの共同の墓地と考えて。

共同の住処であるその墓の上には
風が吹いてきて小枝たちを折るがよい。
秋の雨をともなう嵐の中で
枯れしおれた、もろい小枝たちを。

そうすれば、わたしは墓の中でおのずと聴くだろう
雨が人の世で激しい雨音を立てるのを。
壁の向こう側でその雨音を聞くと、一
わたしは、再び朝に目覚めることを知る。

朝、太陽がわたしに輝き、
明るく照り輝いて、力強く暖めてくれればよい。

墓にわたしの子どもたちが遊びに来て、そのうちの一人の子が
笑い声を立てくれれば、それでよい。

1903年7月7日 リマヌフにて

これらの詩が書かれたとき、ヴィスピャンスキは悪疾に苦しみながら、ベスキド山脈の山裾の保養地リマヌフに蟄居し、創作にいそしんでいた。ヴィスピャンスキは抒情詩人でもあったが、自作の詩に対しては峻厳な態度で臨み、公表を拒否し、いくつかの詩を焼き捨てるように友人たちに頼み、自らも意に満たぬ作品を焼却したらしい。死を強く意識したこの2編の詩は、親友でクラクフ劇場の舞台俳優のレオン・ステンポフスキ **Loen Stępowski** (1852–1914) に宛てた私信の中に挿入されたもので、焼失を免れて今日に伝えられた。

妻子に対する限りなき愛情

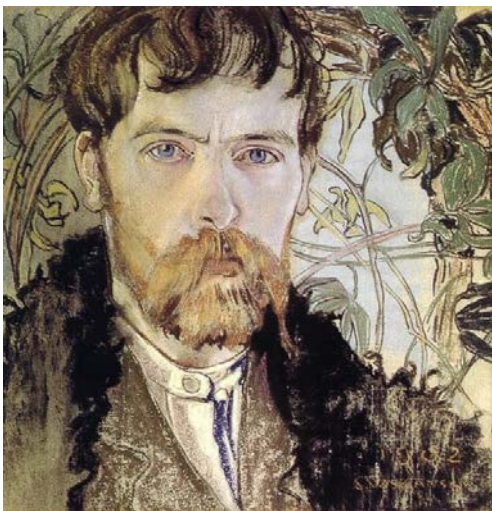
これらの詩には、妻子に対する限りなき愛情と不死(復活)の信念と自己の芸術の不滅の精神が強烈に表現されている。ヴィスピャンスキの家族関係は、妻や子どもをモデルにした彼の美しいパステル画から想像できる。「母性 **macierzyństwo**」と題するいくつかの類似の絵画のうち、若い母親が乳飲み子に授乳し、二人の少女が優しくそれを見守っている絵(1905年作、クラクフ博物館所蔵)は最も有名である。類似の絵の授乳する母親のモデルは、いずれも横顔の美しい若い女性である。私は、ヴィスピャンスキの夫人も美しい女性であろう、と想像した。ところが、「妻と共なる芸術家の自画像」(1904作、クラクフ博物館所蔵)を見ると、やつれた姿の画家の隣に描かれている夫人は、どう見ても野暮ったい農婦であり、しかも怒ったような怖い顔をしている。「農民服姿の芸術家の妻」(1902年作、ワルシャワ博

物館所蔵)の女性も厳しい顔つきである。

ヴィスピャンスキ夫人について詳細は知られていない。彼女は名をテオドーラ・テオフィーラ・ピトコ **Teodora Teofila Pytko** といい、クラクフの西方、ジャブノ近郊の村の出身。芸術家は、彼女をテオーシャ **Teosia** という愛称で呼んでいたという。テオドーラはクラクフに出て、聖フランシスコ教会の改修工事を手伝っていた。その時、聖堂のステンドグラスの制作に従事していたヴィスピャンスキと知り合い、婚外の子どもを産んだ。クラクフ市当局はそれを把握していなかったため、戸籍等の記録は正確性を欠く。テオドーラは3人の子をもうけた。のちに、芸術家は、妻を籍に入れ、妻子を愛した。彼の描く子どもの絵はいずれも美しい。しかし、当時のポーランドは貴族社会であり、貴族と農民との結婚は、いわゆる“**mésalliance**”(身分違いの不釣り合いの結婚)でスキャンダルの対象だった。それに、芸術家の病気は、当時治療不可能とされた梅毒であった。妻のテオドーラは、当然そのことを承知していた。肖像画に見られる彼女の不機嫌そうな顔は、それを匂わせている。彼は、1890–1895年のヨーロッパ遊学中にどこかでこの病気に感染したらしい。死が迫ったとき、ヴィスピャンスキは妻と子どもを妻の田舎に返したかフランシスコ会の修道士に養育を託したかしたらしい。

1907年11月28日ヴィスピャンスキは世を去った。「わたしの墓前ではだれにも泣いてほしくない。ただひとりわが妻を除いては」という願いとは異なり、彼の葬儀には4万人を超える人が参列して、偉大な芸術家の死を悼んで泣いた。(くりはら しげお)

※ ヴィスピャンスキ「わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない」は「午後のポエジア」5(2015.6.13)において、エヴァ・コヴァルスカ **Ewa Kowalska** さんと新井藤子さんによって朗読されました。



(左) ヴィスピャンスキ自画像(1902)
(右) 妻と共なる芸術家の自画像(1904)
Wikipedia ポーランド語版より

バルシュチェフスキ『ベラルーシ幻想譚』より

越野 剛

リトアニア、ベラルーシ、ウクライナはかつてポーランド文化の強い影響下にありました。これらの国々にはポーランド語で書かれた多くの文学作品が残されています。ベラルーシ出身のヤン・バルシュチェフスキ Jan Barszczewski (1790/94-1851) もその一人で、ベラルーシの伝説やフォークロアをもとにした作品をポーランド語で書きました。ポーランド本国では忘れられた作家ですが、ベラルーシでは今日でもよく知られています。代表作の『土族ザヴァルニャ、あるいはベラルーシ幻想譚』(1844-46) は表題に「ベラルーシ」が入った最初の文学作品とも言われます。土族ザヴァルニャの屋敷に泊まる旅人たちが宿賃がわりに語る不思議な物語を集めた、いわばベラルーシ版の「千一夜物語」です。

狼に変身した男マルカの物語

そのうちの一話、狼に変身した男の物語を紹介します。マルカというベラルーシ人の農民はアリョーナという美しい娘に惚れこんでいるが、彼女は領主のお気に入りのお婿と望まぬ結婚をさせられます。結婚式の祝いの席でマルカは魔法のかかったウォッカを飲まされて、そのせいで狼に変身してしまいました。マルカはその後何年ものあいだ森の中で暮らすこととなります。腹いせのため自分に魔法をかけた男の娘をさらうという罪を犯しますが、カトリックのお坊さんの説教を聞いて悔い改め、狼の姿のまま人間のために善い行いをしようと決心します。やがて不思議な夢の中で墓場から自分の死体を掘り起こすように命じられ、目が覚めると人間の姿に戻ることができました。ここでは、動物に変えられた人間を元に戻す力を持つという魔女のアクシーニャの屋敷を、オオカミになったマルカが探す場面を翻訳しました。(こしの・ごう)

《森の中から谷間へと駆け下りてみた。天気の良い静かな朝だ。ふと見ると、手足と首がまっ白な猫が草むらに座っている。背中中は白と黒のしまもよう。眼をきょろきょろさせている。ぴょんと跳びはねると花の上の蝶々を捕まえた。猫が楽しそうに跳びはねて遊んでいるのを木陰からずっと見ているうちに、その猫を捕まえたくてたまらなくなり、とびかかった。けれど猫は風のように身軽に草むらから飛び出してしまふ。猫が丘をのぼって走れば、私はその後を追いかける。もうすこしで手がとどくというところで、

なんと猫はカササギに姿を変えて、空に舞い上がってしまう。その先をなおも追いかけていくと、一軒家がぼつんとあるのを見つけた。カササギは屋根の上にとまると再び猫の姿に変わった。よく見ると、そこいらじゅうにいろんな毛色の猫がいる。屋根の上にも、窓べにも、中庭にも、どこもかしこも猫、猫、猫ばかり。

どうやらここが魔女のアクシーニャの住処だろうと察しがついたので、家に入ったものかどうかとその場で考え込んだ。狼の姿をした私は歓迎されないだろうから、どこかで魔女が散歩しているところに顔を出すのがよいだろう。おとなしく足元にはいつくばって私の身の上をあわれんでもらおう。茂みの中に隠れて、よいきっかけを待つことにした。

太陽が森と山の向うに隠れた。うっそうとした森のきわを夕闇が包みこむ。近くの湖は柳にふちどられた水面をまだ光らせていた。すると、猫という猫が、家の中から、屋根の上から、中庭から群れをなして野原のほうに走り出す。そして何かの葉っぱを食いちぎると、その場で若い娘の姿に変身するではないか。娘たちは茂みの間に散らばって、歌を歌ったり、踊りを踊ったり、花を摘んで花輪を編んだりしている。私もその野原に走った。青い小さな花のある葉っぱを見つけて、ちぎって飲み込んだ。するとまたたく間に私は人間の姿になった。えもいわれぬ喜びにかられて、私は蓮っ葉な妖精ルサルカたちの群れに加わった。一緒になって走り、踊って、楽しんだので、自分のみじめな境遇をすっかり忘れてしまうほどだった。

遊び楽しむうちに夜も更けてきた。森には鳥のさえずりも止み、フクロウの鳴く声だけが聞こえる。一羽のフクロウが飛んできて、魔女の家の屋根にとまり、眼をぎらぎらさせながら、赤ん坊のような声で泣いたり笑ったりした。すると不意に森がざわめき、湖で波が岸边に打ち寄せた。ルサルカたちは「真夜中だわ、真夜中だわ」と口々に叫んで、いっせいに猫の姿に変わり、アクシーニャの屋敷の中庭に駆け込んだり、屋根の上に這い上がったたり、窓から家に身を隠すのもいた。私はふたたび狼の姿にもどって森の中に走り、緑の濃いもみの木の下に横たわって、一夜の出来事に思いをはせた。人間の姿に変わるのが長くは続かなかったのは残念だった。ここに残って、ほんのひとときでも自分の不幸せを忘れたいと心に決めた。》